

知的障害・発達障害児を対象とした遊び支援に関する文献的検討 —保育場面における実践的介入の考察—

A Literature Review on Play Support for Children with Autism Spectrum
Disorder :
Consideration of Practical Interventions in Early Childhood Education Settings

著者：伊藤貴大*・加藤幸哲**

所属：目白大学人間学部*・岐阜県立海津特別支援学校**

英文氏名：Takahiro ITO*・Yukinori KATO**

英文所属：Faculty of Human Sciences, Mejiro University*
Gifu Prefectural Kaizu Special Needs School**

要旨：本研究では、保育場面で実施された知的障害、発達障害児を対象とする遊び支援に関する先行研究の文献レビューを実施し、保育場面において有効性の高い実践的介入について考察することを目的とした。文献の選定対象は、保育所、幼稚園、および認定こども園において実施された、知的障害、発達障害児の遊びの支援に関する介入研究とし、その結果、7件の論文が抽出された。著者2名による結果の分析の結果、知的障害、発達障害児の遊びに対する介入の目的としては、社会性の向上が最も多いことが明らかになった。また、採択された全ての文献において、介入の有効性が示されていたものの、介入に大学教員等の専門家が関与している文献がほとんどであった。今後の課題として、保育者自身が障害児への介入スキルを身に付けられるよう、保育者を対象とした研修パッケージの開発について論じた。

キーワード：知的障害 発達障害 保育場面 遊び 文献レビュー

1.はじめに

近年、保育所等において障害児が増加傾向にあることがわかっている¹⁾。原口・野呂・神山²⁾がある特定の県の公立幼稚園を対象に調査した研究によれば、幼稚園の88%に特別な配慮を要する子どもが在籍していることが明らかになっている。さらに、佐久間・田部・高橋³⁾は全国の公立幼稚園を対象に特別な支援を要する子どもの在籍状況に関して調査を実施し、85.6%の園に在籍状況が認められたことを報告している。このように、現代における保育所等においては障害児や特別な配慮を要する子どもの在籍が当たり前の現状である。その中で、荻野⁴⁾は従来の支援体制である児童発達支援事業所等の療育施設における個別支援や集団支援は人数的な制限等から適切な支援の提供が困難であることを指摘しており、保育所等においても障害児や特別な配慮を要する子どもに対する発達支援が必要であることを述べている。早期発達支援に関しては、発達段階に応じた一貫した支援を行っていくことが重要である⁵⁾ことから、乳幼児期において日常生活場面である保育所等における支援の重要性は高いものとなっている。

保育所等における障害児や特別な配慮を要する子どもへの支援に関する先行研究では、コミュニケーションスキルをはじめとする社会性の向上を目的とした研究が多く行われており、その一例として遊びスキルの獲得が挙げられる。乳幼児期の子どもは、同年齢の他児との遊びを通して、コミュニケーション行動や集団活動のスキルを獲得していく⁶⁾。そのため、障害児の遊びスキルの獲得に対するアプローチは極めて重要な課題といえる。特に自閉スペクトラム症（以下、ASD）児は、障害特性から社会性に困難を抱えることが多く、遊びの場面においても他児と関わることに難しさが生じることがある。また、知的障害児においても幼児期以降に集団遊びのルール理解が困難になり、遊びの輪の中に入ることが難しいという現状があり、保育場面において他児と遊ぶ機会があった場合でも孤立してしまうことが問題となっている^{7,8)}。ASD児の社会性向上を目的とした先行研究によれば、遊びスキルを獲得することで、遊びの中で生じる社会的相互交渉が本人にとって強化子となることが報告されている^{8,9)}。このことから、保育場面における遊びへの介入・支援は、ASD児の社会性を育む上で大きな意義を持つことがうかがえる。しかし、保育場面においてASD児に社会的遊びのスキルを教える実証的介入研究は未だ十分ではなく¹⁰⁾、国内においても遊びを通じた社会性向上のための実践的研究は乏しいのが現状である。こうした背景から、保育場面でのASD児を含む障害児の遊びに対する実践的介入研究を整理し、有効性の高いアプローチを抽出することは、今後の支援の展望を切り拓く上で不可欠な作業といえる。そこで本研究では、保育場面におけるASD児を対象とした遊びへの実践的介入を実施した文献を精査し、研究動向とその効果を明らかにすることを目的とする。尚、日本保育協会が2016年に実施した調査¹¹⁾によれば、保育園

に在籍している障害児の約 70%が知的障害児と発達障害児であることが明らかになっている。このことから、本研究においても発達障害児及び知的障害児を対象とし、文献の抽出を実施する。

2.方法

(1)対象文献の検索

本研究では、国立情報学研究所の CiNii Research を使用し、障害科学を専門とする第一著者が文献を抽出した(最終検索日：2025年12月11日)。検索キーワードは、「発達障害/知的障害/自閉/ADHD/ASD」と「幼稚園/保育/認定こども園」の組み合わせに「遊び」を含めて実施した。

(2)対象文献の選定

検索の結果、抽出された文献は86編であった。抽出された文献の abstract を第一著者が確認し、対象児が知的障害、発達障害児ではない文献、実践的介入ではない文献、介入場面が保育所、幼稚園、認定こども園以外の文献、介入手続きが不明な文献、介入効果が明らかになっていない文献、及び重複した論文、学会の発表抄録集、科研費報告書等の文献を除外した。その結果、抽出された文献は29編であった。抽出された論文を第一著者と特別支援教育学を専門とする第二著者が論文本編を読んで内容確認し、上述した条件に合致する文献かどうかを確認した上で、文献の最終的な選定を行った。なお、著者同士の判断が一致しない文献に関しては協議の上で選定の可否を決定した。その結果、最終的に抽出された文献は7編であった (Fig.1)。

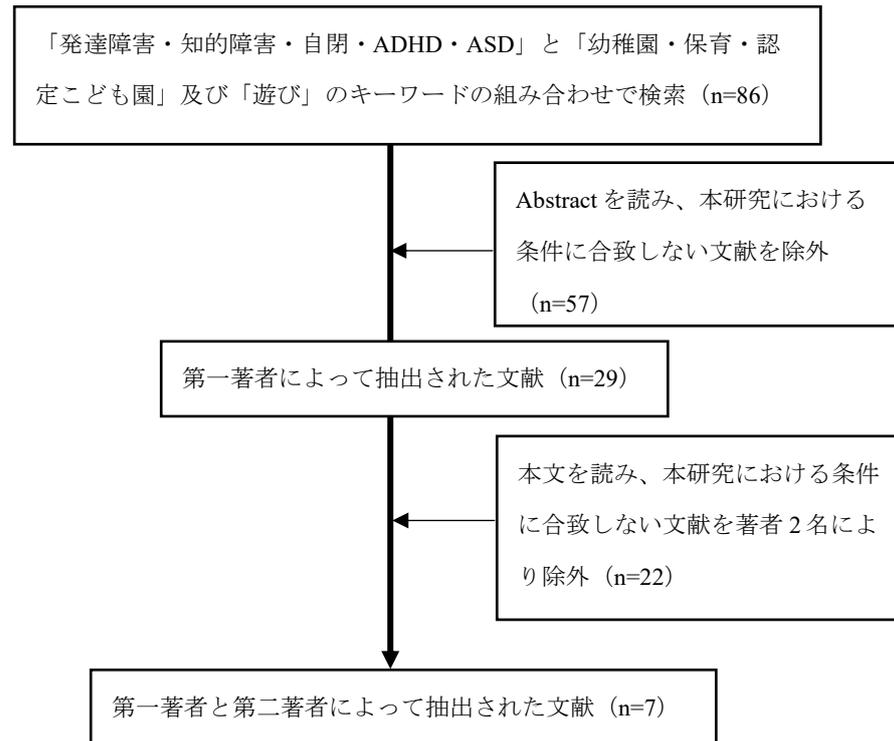


Fig.1 遊び支援の実践的介入に関する文献選定のフロー

(3)分析項目

抽出された対象文献の分析項目は①対象児の年齢、診断名②介入の実施者③介入を実施した場所④介入手続き⑤介入効果とした。

3.結果

抽出された文献を分析項目ごとに整理した結果を Table 1 に示した。

(1)対象児

対象児は3歳児が2名、4歳児が4名、5歳児が3名であり、幼児期における支援が多い結果であり、介入対象となった子どもは1名から2名であった。文献に記載されていた対象児の診断名はASDが3名、広汎性発達障害が2名、知的障害が1名、言語発達遅滞が1名、ASD傾向が1名、診断名無しが1名であり、広汎性発達障害を含むASD児が多い結果であった。尚、本研究では対象児を知的障害児、発達障害児に限定して検索を実施したが、複数の障害を合併する子どもを対象に介入を実施している文献が含まれたため、記載されていた障害名称は変更せずにすべて記載した。

(2)実施者

抽出された文献における介入の実施者は、保育士、幼稚園教諭、大学教員、大学院生、療育専門家、大学院生、心理士であり、単独での介入や複数の支援者の組み合わせによる介入が実施されていた。介入内容を大学教員等の専門家が考案し、保育者が支援を実施する文献が計5編であった。

(3)実施場所

抽出された文献における介入の実施場所は、幼稚園が2編、保育園が2編、認定こども園が1編であり、大学の教育相談室や療育機関と保育場面の組み合わせで実施した研究が2編であった。普段の保育場面の中で対象児のみに対して活動を設定して支援・指導を実施している文献^{12,13)}や、集団の中で介入を実施している文献が見られた^{14,15,16)}。また、藤原・園山⁸⁾は大学の教育相談室における個別指導において遊びスキルへの介入を実施し、教育相談室にて獲得した遊びスキルを幼稚園で実施することで、遊びの般化を目指す研究を実施しており、平¹⁷⁾も同様に療育場面で獲得した遊び場面における言語的スキルを幼稚園の遊び場面へ般化させる介入を実施していた。

(4)介入手続き

保育場面における介入手続きは遊びスキルの獲得、及び拡大を実施した文献が3編であり、遊びを媒介として社会性や言語表出等のスキル獲得を目的とした文献が3編、介入によって遊びへの影響を検討した文献が1編であった。遊びスキルの獲得に関する文献としては、伊藤・青木・野呂¹⁴⁾は集団遊びを課題分析することで対象児が躓いている行動

Table 1 選定された遊び支援の文献一覧

著者(年)	対象児の年齢・診断	実施者	介入場面	介入手続き	対象児への効果
小松・小林 (2014)	5歳児 (高機能広汎性発達 障害)	保育士	保育所 (集団保育場面)	対象児に対して保育所の日常場面における生態学的アセスメントを行動観察、及び聞き取りにて実施し、その所見に基づき担任保育士と共に支援計画を立案。その中で、仲間との関係性構築支援の一つとして、集団ゲーム遊びを実施。集団ゲーム遊びは環境を構造化して行い、ボールゲーム、鬼ごっこ、しっぽ取りを実施した。ゲームの流れは①ルール説明、目標確認②準備体操③ゲーム遊び④振り返りで構成された。	ソーシャルスキル尺度の得点は他者、抑制、主張、協調のすべての得点で向上がみられた。集団ゲームでは自分が思ったプレーができないと逸脱することもあったが、仲間からの応援で気持ちを切り替えられるようになった。しっぽとりでは残ったことの喜びを他児と共有する場面がみられた。また、保育者、及び保護者からの聞き取りでも概ね肯定的な意見が得られた。
平(2014)	5歳児 (広汎性発達障害)	療育専門家 幼稚園教諭	療育教室 幼稚園 自由遊び場面	対象児に対してアセスメントを実施、及び保護者の願いを確認した上で個別支援計画を作成。保護者に了承を得た上で支援を実施した。支援は療育場面における個別指導と療育場面で使用した写真を幼稚園においても活用する形で実施し、自発的な表出言語を記録した。	療育場面においては、他児との言語的なやり取りが増加。「みて」「順番だよ」等の発語が遊び場面において観察されるようになった。2カ月ごとに記録した幼稚園場面においても、自発的な言語表出の生起数の増加が確認され、遊び場面において他児に対して「貸して」と表出する場面などがみられた。
白石(2015)	4歳児(ASD) 3歳児(診断名不明)	保育士・心理士	幼稚園 (自由遊び・設定場面)	対象児を保育者・心理士の2名で行動観察し、幼児の社会的スキル尺度にて評価。対象児が必要としている社会的スキルを選定し、所見を作成。所見に基づき支援計画を作成し、支援を実行。支援終了後、再度尺度によるアセスメントを実施。第1期から第3期までペープサートや音楽遊び等をモデル提示、声掛け、約束事の提示にて支援。主に共同注意を中心とした社会的スキルの向上を支援を実施。	対象児ごとに共同注意による主張スキル、及び共同注意による協調スキルの獲得を目的とした支援を実施。結果、両者ともに社会的スキル領域得点が支援開始前に比べ増加し、問題行動領域得点が支援前に比べ減少した。一方で、対象児1名に関しては攻撃行動が、もう一名は社会的スキルの得点にあまり伸びがみられない結果となった。

藤原・園山
(2015)

5 歳児 (ASD)

大学院生
幼稚園教諭

大学教育相談室
幼稚園
(自由遊び場面)

対象児に対し、幼稚園の自由遊び場面、担任、母親に対するアンケート、聞き取りによる生態学的調査を実施した。その後、大学の教育相談における社会的遊びのアセスメントを実施し、幼稚園で実施可能な社会的遊びを担当と協議し、各遊びの行動を単位ごとに設定して標的行動として設定。ベースライン期、指導Ⅰ、Ⅱ期は大学の教育相談室にて遊びへの介入を実施し、幼稚園では「しっぽとり」「お店さんごっこ」の社会的遊びの参加に対し、指差し、声掛けのプロンプト介入を実施した。

「しっぽとり」ではBL期ではとられても椅子に座らなかったが、指差しや声掛けのプロンプトを続けた結果、自発的に単位行動が生起するようになった。幼稚園場面では担任のプロンプトがあれば鬼、子どもの役でも参加することができた。「お店さんごっこ」では早い段階で正反応率が上昇しており、幼稚園場面では最初は他児にものを渡すことができなかったが、担任のプロンプトで4回は渡すことができた。また、社会的相互交渉もBL期に比べて向上した。

著者(年)	対象児の年齢・診断	実施者	介入場面	介入手続き	対象児への効果
古賀・丹羽・小田(2017)	4歳児2名 (ASD・言語発達遅滞)	大学教員	保育所 (集団保育場面)	保育園の4歳児クラス30名(対象児2名含む)において集団音楽表現活動を月1〜3回、約30分間実施。セッションは15個あり、それぞれ「活動の始まりの認識」「他者認知・スキミング」「身体部位認知」「社会性・ルール学習」「模倣」「運動動作」「空間認知」「即時反応」「役交代」「音楽への同期」「活動の終わりの認識」の目的があった。※活動の目的は著者にてわかりやすい表現に変更したものがあ	はじまりの活動では、円の中に入ってしまう行動がみられたが、円の隊形に加わった時点で活動を開始すると他児とのかわりに広がりがみられるようになった。わらべうたの場面では役割交代の場面では役に成れないと機嫌を損ねる場面もあったが、次第に一緒に歌う様子が見られた。リトミックでは保育士の介入や他児の模倣がみられたが、遊びの気持ちの共有には難しさがみられた。太鼓の活動では叩くことにこだわりがあったが、順番待ちができるようにはなっていた。
藤原・園山(2018)	3歳児(ASD傾向)	大学院生・担任	認定こども園 (自由遊び場面)	対象児に対し、自由遊びと設定遊び場面における生態学的調査を実施。自由遊び場面では遊びに使用した道具、社会的遊びの段階、遊び方、遊びにおける関わりを記録。設定遊び場面では遊びに必要な行動の生起、参加の頻度、環境設定、担任、介助員とのかわりを記録。さらに、担任から普段の遊びに関する聞き取りを実施。その後、生態学的調査の結果から対象児が参加しやすい遊びの条件の仮説を立て、参加しやすい遊びを設定。各遊びに対して用意した道具による支援と支援者による言語プロンプト、モデル提示等による支援を行った。	自由遊び場面、設定遊び場面における行動観察及び生態学的調査から「葉屋さん」「絵合わせ」「お芋運び」に支援を実施。「葉屋さん」では支援開始直後から遊びに参加し、現尾的なやり取りが生起した。また、他児が始めたごっこ遊びに参加しに行く様子も見られた。「絵合わせ」「お芋運び」については声掛けが必要な部分はあったが、遊びへの参加はできており、担任、介助員からの評価も高い評価であった。また、他場面では他児とのかわりも見られた。
伊藤・青木・野呂(2024)	4歳児 (知的障害)	担任	幼稚園 (設定遊び場面)	幼稚園の月案に則った集団遊びにおける対象児の行動参加を課題分析によって細分化し、行動生起が困難な行動に対してABC分析を実施することで、行動の随伴性を明らかにした。その後、担任、専門家による協議によって先行子操作に基づく介入内容を検討し、確定した介入を担当者が集団遊び場面において導入した。	介入を実施した集団遊びは「ことしのぼたん」「I字開戦」「木鬼」であり、「ことしのぼたん」「木鬼」については、鬼を視覚的にわかりやすくするためのヘアバンドを導入する先行子操作を実施した。その結果、対象児の標的行動の生起頻度は向上し、他児との関わりについても確認された。「I字開戦」については特別な介入を実施していないが、担任の声掛けが強子になって活動参加が維持されていることが確認された。

を抽出し、介入は先行子操作に基づき、保育の文脈に沿った形で実施する手続きであった。藤原・園山⁸⁾は生態学的アセスメントに基づき、幼稚園で実施可能な遊びを選定し、大学の教育相談室にて遊びの介入を実施した。大学で獲得した社会的遊びは幼稚園の遊び場面において再度実施することで、集団遊び場面における遊びスキルの般化までを検討する手続きであった。また、藤原・園山¹²⁾では、自由遊び場面と設定遊び場面における生態学的調査を実施し、対象児が参加しやすい遊びの条件を設定することで、各遊びへの参加を促進する介入を実施していた。

社会性の向上を目的とした介入に関しては、小松・小林¹⁶⁾は生態学的アセスメントを実施した上で、集団ゲーム遊びを構造化環境にて実施し、仲間との関係性構築を目的として介入を実施していた。白石¹³⁾は社会的スキルの向上を目的として介入を実施しており、立案した支援計画に基づき音楽遊びやペープサートなどを活用した手続きを実施していた。平¹⁷⁾は療育場面で支援した手続きや使用した教材を幼稚園における自由遊び場面にて活用する手続きにて介入を実施し、自発的な音声言語表出の促進を目的としていた。

古賀・丹羽・小田¹⁵⁾は保育園の4歳児クラス30名(対象児2名含む)において、遊びのルール理解を深めるための音楽療法を実施しており、「活動の始まりの認識」「他者認知・スキンシップ」「身体部位認知」「社会性・ルール学習」「模倣」「運動動作」「空間認知」「即時反応」「役交代」「音楽への同期」「活動の終わりの認識」を含む集団場面への適応を目的としていた。

(5)介入効果

保育場面における遊びに対する介入の効果は、抽出された7編の文献のすべてで介入の効果を確認された。遊びスキルの獲得を目的とした文献^{8,12,14)}においても、標的行動であった遊びスキルの獲得だけではなく、他児との関わりが増加したことを評価、報告していた。小松・小林¹⁶⁾は介入後にソーシャルスキル尺度の得点が向上し、保育者や保護者からの肯定的な評価を得ることができていた。平¹⁷⁾は、療育場面においては「みて」、「順番だよ」等の言語表出が遊び場面において観察されるようになり、幼稚園場面においても他児に対して「貸して」等の言語表出が生起が確認された。白石¹³⁾では、対象児ごとに効果に差異は見られたが、介入後に社会的スキル領域得点の増加が確認され、問題行動領域得点が減少した。古賀・丹羽・小田¹⁵⁾では、介入実施後に他児とのかかわりや一緒に歌う姿が確認され、保育士や他児の模倣についても確認された。

4.考察

本研究において抽出された文献を分析すると、遊びスキルを獲得することを目的とした研究と、社会性の向上等の促進を目的に遊びに介入する研究の2種類に大きく区分されることが明らかになった。

抽出された文献の数に関しては、保育所等で障害児が増加している現状がある¹⁾一方で、障害児を対象とした保育場面における遊び支援の実践的な介入研究は7編と少ない結果となった。抽出された文献における対象児の年齢は3歳以上であり、ルールのある遊び等が増加する幼児期以降に集中している結果であった。この結果は、集団遊び場面における人間関係の困難さが表面化しやすい幼児期になってから介入が実施されている可能性が考えられる。さらに、遊びの促進に関する文献が少ない理由として、問題行動等に比べ対象児の困難さや他児に対する影響が表面化しにくいことから、保育場面においても支援ニーズが高くない可能性が想定される。一方で、保育場面は遊びを中心としてその他のスキルを獲得していくことから、保育士ができる介入として、障害児の遊びに対する実践事例の蓄積は喫緊の課題であると考えられる。

本研究において抽出された文献において、介入を実施した環境はその多くが自由保育場面によるものであった。療育場面や特別支援教育の領域では、ASD児や知的障害児に対する有効な手続きとして、TEACCH (Treatment and Education of Autistic and related Communication handicapped CHildren) のように構造化が有効であるとされ、井澤・須永¹⁸⁾は、文脈的構造化の設定は、ASD児の社会的相互交渉を促進する条件の一つであることを述べている。一方で、構造化や行動論に基づく介入は、環境事象に行動要因を帰属することから、以前は他学派からの否定的な意見も挙げられており¹⁹⁾、本研究において抽出された文献においても構造化されていない場面での介入がほとんどであった。その中で、藤原・園山⁸⁾、藤原・園山¹²⁾、伊藤・青木・野呂¹⁴⁾の文献は、保育場面において応用行動分析学の理論を導入した介入であった。近年、自然主義的発達行動介入法 (Naturalistic Development Behavioral Interventions : NDBI)による構造化されていない環境での介入に関する研究知見が蓄積されており、前述した文献においても日常場面の文脈に即した形での介入を実施していた。この結果から、構造化環境に依存しない行動論による介入は、保育場面にとって抵抗感が少ない可能性がある。また、平¹⁷⁾や藤原・園山⁸⁾のように、大学の教育相談室や療育機関等の個別支援と並行しながら保育場面において必要なスキルの獲得を促進する文献も確認された。東京都では2025年より児童発達支援事業は0才児から利用者負担が無償化されており²⁰⁾、児童発達支援が利用しやすい状況が制度化され始めている。このことから、今後は療育場面と保育場面で連携しながら必要なスキルを身に付けていく流れが主流化する可能性がある。

介入者に関しては大学教員などの専門家に比べ、現場支援者による介入が多い結果であった。一方で、文献内に詳細な記載はないものの、大学教員が介入計画を立案、あるいはコンサルテーションを実施していると想定される文献がほとんどであった。障害児や特別な配慮を要する幼児に対する指導は専門性が問われる一方で、保育者がその知識を持ち合わせていない「知識不足」、あるいは「知識だけでは対応が難しい」ことで対応に苦慮していることは先行研究においても指摘されている²¹⁾。松崎・山本²²⁾は保育者が地域における早期支援の実践家となるうえで、効率的に支援技術を向上させる研修プログラムの重要性を述べており、実際に保育者を対象とした発達支援の研修は、荻野²³⁾や田中・馬場・鈴木・松見²⁴⁾等、先行研究も蓄積され始めている。しかしその多くは行動問題等に対する支援に関する内容であり、行動問題が生じた後の予後的対応となる研修が多くを占めている。知的障害、発達障害児が乳幼児期において社会性の基盤を獲得する上で、今後は遊び支援に特化した保育者向けの研修パッケージをリソースとして提供できるようなシステムの構築が求められる。

最後に、本研究における限界と課題を述べる。本研究で選定された文献は、著者らによって実践的介入であると明確に判断できる文献を対象としたが、介入手続きにおける厳密性に関しては文献を選定する際の条件として明確に設定していない。そのため、介入手続き、手法が文献によって異なり、介入効果に差異がみられる結果となった。さらに、文献抽出の条件として介入手続きの提示を条件にしたことにより、文献数が著しく減少する結果となった。保育学では、エピソードから子どもの心理、行動変容を読み解く質的アプローチによる研究が主流であることから、今後はエピソード事例の分析等を実施した文献を含む形で遊び支援に関する効果的な研究を明らかにすることが求められる。

付記

本研究はJSPS 科研費 24K22737 の助成を受けた。また、本研究の一部は日本特殊教育学会第 62 回大会で発表した。

引用文献(*は分析対象論文)

- 1) 柘 千晶・橋本創一・秋山千枝子(2016). 「インクルーシブ保育における特別な支援を要する子どもの活動参加に関する調査報告：参加可能な遊びに着目して」. 『小児保健研究』, 75(5), 636-641.
- 2) 原口英之・野呂文行・神山 努(2015). 「幼稚園における特別な配慮を要する子どもへの

- 支援の実態と課題:障害の診断の有無による支援の比較」.『障害科学研究』,39,27-35.
- 3) 佐久間庸子・田部絢子・高橋 智(2011).「幼稚園における特別支援教育の現状:全国公立幼稚園調査からみた特別な配慮を要する幼児の実態と支援の課題」.『東京学芸大学紀要 総合教育科学系II』,62,153-173.
- 4) 荻野昌秀(2022).「保育所における発達支援ニーズのある児の 早期支援の効果に関する検討」.『特殊教育学研究』,60(1),23-32.
- 5) 笹森洋樹・後上鐵夫・久保山茂樹・小林倫代・廣瀬由美子・澤田真弓・藤井茂樹(2010).「発達障害のある子どもの早期からの総合的支援システムに関する研究発達障害のある子どもへの早期発見・早期支援の現状と課題」.『国立特別支援教育総合研究所研究紀要』,37,3-15.
- 6) 大内晶子・櫻井茂男(2008).「幼児の非社会的遊びと社会的スキル・問題行動に関する縦断的検討」.『教育心理学研究』,56(3),376-388.
- 7) Goldstein, H., Kaczmarek, L., Pennington, R., & Shafer, K.(1992)Peer-mediated intervention:Attending to, commenting on, and acknowledging the behavior of preschoolers with autism. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 25(2),289-305.
- 8) *藤原あや・園山繫樹(2015).「自閉症スペクトラム児に対する社会的遊びの指導:遊びの条件がスキル獲得と般化に及ぼす影響」.『自閉症スペクトラム研究』,12(2),33-43.
- 9) Macdonald, R., Sacramone, S., Mansfield, R., Wiltz, K.& Ahearn, W. H.(2009)Using video modeling to teach reciprocal pretend play to children with autism. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 42,43-55.
- 10) Fujiwara, A., Sonoyama, S.(2018). The effects of selection and intervention in social play based on an ecological assessment of a child with autism spectrum disorder at a kind-ergarten. *Journal of Special Education Research*,7(1),47-56.
- 11) 日本保育協会(2016).「保育所における障害児やいわゆる「気になる子」等の受入れ実態、障害児保育等のその支援の内容、居宅訪問型保育の利用実態に関する調査研究報告書」.『子ども・子育て支援推進調査研究事業実施事業』,1-139.
- 12) *藤原あや・園山繫樹(2018).「認定こども園における自閉スペクトラム症児に対する社会的遊びの支援:遊びの選定方法と支援の効果の検討」.『自閉症スペクトラム研究』,15(2),25-35.
- 13) *白石京子(2015).「障害児保育:自閉症児のためのコミュニケーション発達支援プログラムの開発及び効果の測定」.『生活科学研究』,37,179-190.
- 14) *伊藤貴大・青木康彦・野呂文行.「幼稚園における知的障害児に対する遊び活動スキ

- ルへの応用行動分析学的介入」.『自閉症スペクトラム研究』,2024,21(2),31-40.
- 15) *古賀弘之・丹羽裕紀子・小田紀子(2017).「保育園での音楽表現活動ー自閉症スペクトラム児 A の行動変化ー」.『名古屋市立大学大学院人間文化研究科』,27,81-89.
 - 16) *小松昌代・小林 真(2014).「高機能広汎性発達障害のある男児に対する支援的な保育:ルールのあるゲーム遊びを通したクラス集団への介入を通して」.『富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究』,31(9),51-60.
 - 17) *平 雅夫(2014).「知的遅れのない自閉症スペクトラム幼児への支援」.『自閉症スペクトラム研究』,12,15-21.
 - 18) 井澤信三・梶永真代(2001).「自閉症生徒間における社会的相互交渉を促進するためのプロンプト条件の検討」.『兵庫教育大学研究紀要. 第1分冊, 学校教育・幼年教育・教育臨床・障害児教育』,21,123-131.
 - 19) 村中智彦(2019).「自閉症スペクトラム障害といじめ行動ー応用行動分析学からみた理解と予防支援ー」.『日本学校心理士会年報』,12,42-53.
 - 20) 東京都福祉保健局(2025).「児童発達支援事業所等利用支援事業（利用料の無償化）」.
(<https://www.fukushi.metro.tokyo.lg.jp/shougai/nichijo/syougai/daishimushouka> 最終閲覧日：2026年1月13日)
 - 21) 櫻井貴大(2018).「保育者が発達障害を保育するうえで抱える保育困難の段階に関する研究」.『国際幼児教育研究』,25,141-152.
 - 22) 松崎敦子・山本淳一(2015).「保育士の発達支援技術向上のための研修プログラムの開発と評価」.『特殊教育学研究』,52(5),359-368.
 - 23) 荻野昌秀(2017).「保育所における発達支援ー保育士研修の効果の検討ー」.『自閉症スペクトラム研究』,15(1),31-38.
 - 24) 田中善大・三田村仰・野田航・馬場ちはる・嶋崎恒雄・松見淳子(2011).「応用行動分析の研修プログラムが主任保育士の支援行動に及ぼす効果の検討」.『行動科学』,49(2),107-113.